

として藏せられてある。一九一六年にペリオ氏はこの書の一部を譯述して引用し、一九二一年にスタイン氏はその著 *Serindia* の第四卷圖版 CLIX に殘卷中の第五十六行から第八十四行に當るところを寫し出し、且つ同書第一卷三一八頁以下に於て、上述ペリオ氏の譯述に基いて論述を試みた。その後余が大英博物館でこの殘卷の全部を寫眞して來たので、我が藤田博士や石田學士神田學士等がそれについてまた一部分を引用し研究せられたことのある以外には、その全文はまだ一般に知られてゐないものである。今小川博士の還曆祝賀に當り、多少の考釋を附してこれを公けにするのは、その専門とせらるゝ地理の學に因んだ所以に外ならぬ。

## 二 體裁

本書は豎我が曲尺八寸八分の白麻紙を繼ぎ合せた卷子本で、こゝに掲げた寫眞によつて認められるやうに、首部に於て殘缺してゐるが、末尾は完存して書寫の年月、寫手、來歴等を詳らかにした尾跋を以て終り、本文は八十四行を存して居る。書中諸所に校合の痕を残し、薄墨を用ゐて訛脱を補訂してある。かく細密の校合を経たにも拘はらず、本文と割註とが形式上必ずしも一定せず、當然註の形を取るべき文で本文の形に書かれて居るところが少なくない。思ふにこれは本書の據つた原本に於て既にかゝる錯雜が存して居つたのに外ならぬであらう。

## 三 本文の轉寫

本文には字畫の正しからぬものが頗る多く、今一々そのままに刻出することは出來ないから、差支ない限り正し